

障害者スポーツにおける「障害/健常」意識の変容過程に関する研究

—車椅子バスケットボール競技者に着目して—

○河西正博（立教大学大学院） 松尾哲矢（立教大学）

I 研究目的

障害者スポーツの領域においては、大きく分けてリハビリテーションスポーツ、競技スポーツ、生涯スポーツの視点から研究が行われている。先行研究においては、スポーツによる障害の軽減、二次障害の予防、パラリンピックを頂点とした競技的観点からの障害者スポーツ振興の方策について、日常的にスポーツを行うための環境整備について等のテーマを中心に議論がなされている。また、多くの研究においては、「障害」がスポーツ活動を阻害する負の要因として指摘されており、「障害者」「障害」という概念が画一的に捉えられている傾向が看取される。星加（2002）は障害の意味付けについて、「障害者のアイデンティティの中に占める『障害』の位置は個別具体的な状況に相関して多様であり得るのだが、『障害』に特別な意味を与えて障害者を規定する社会的な圧力の中で、『障害』への態度を意識せざるを得ない場面は多い。」と述べている。つまり、本来「障害」の意味付けは非常に多様であり、障害をもつ個人によって異なるものであるはが、社会的な圧力によって、あたかも明確な回答があるかのように捉えられてしまっているということである。また、阿部ら（2001）は、障害者水泳に参加している2名の選手のインタビューから、対象者が障害やスポーツを生活の中でどのような資源として用い、自らの生を戦略的に生きているのかに焦点を当て、「いわゆる『障害者』もまた、つねにかわらず『障害者』であり続けているわけではない～（筆者中略）場面ごとに『障害者』であったり、なかつたりする様子もまた、人々が生きている現代の『生』だとするなら、それをとらえる研究視角があつてもいい」と述べている。これらの言葉から浮かび上がってくるのは、障害をもつ人々が、暗黙のうちに了解されている「障害者」としてのみ生きているのではなく、状況に応じてさまざまな「顔」をもつ存在として生きているということである。

このことは、これまで自明のものとなっていた上記の障害者スポーツにおける「障害」「障害者」「健常」概念が状況や関係性に応じて変化するということを示唆するものといえよう。そこで本研究では、障害者スポーツの中でも競技団体の組織化、競技力、競技人口等の点から、わが国の代表的なスポーツの一つである車椅子バス

ケットボールに着目し、スポーツへの取り組みと「障害」「障害者」「健常」意識の変容過程を検討することを目的とする。現在、車椅子バスケットボールにおいては、障害のない競技者が近年増加している。このため、既存の障害者スポーツにおける「障害をもっている」という暗黙の参加資格が無効化されつつあり、既存の「障害者スポーツの枠組み」では解釈ができなくなってきた。これらの現状のもとに、障害者がスポーツと出会うことで、「障害」「障害者」意識がどのように変容したのか、を明らかにするとともに、「障害者」競技者が「健常者」競技者に対してどのような意識を抱いているのか、両者の関わりによって「障害/健常」意識の変容過程について検討する。

II 研究方法

1. 調査対象・時期・方法

2008年8月、日本車椅子バスケットボール連盟（以下、JWBFとする）加盟全チーム（88チーム）を対象に質問紙を郵送し、40チーム 278名の競技者から回答を得た（回収率：45.4%）。

2. 主な質問項目

質問項目は以下のように設定した。1. 対象者属性（性別、年齢、職業、チーム所在地、障害区分・受傷原因、車椅子バスケットボール経験年数、競技歴、持ち点）/2. チームと自身の活動状況/3. スポーツ全般に対する意識について/4. 車椅子バスケットボールへの取り組み・意識について（車椅子バスケットボールを始めるきっかけとなった人物、活動目的等）/5. 障害者スポーツ観について（スポーツをするに当たっての障害の捉え方、車椅子バスケットボールを始めて傷害に対する意識が変わったかどうか・どのように変わったのか、「健常者」とともにプレーすることについて）

III 結果

1. サンプル特性

1) 回答数：278名

（男性：254名/女性：24名）

2) 年齢

平均年齢：37.44 歳

標準偏差：11.327

3) 障害区分

表1 障害区分	人数	割合(%)
有効		
1脳梗塞	206	75.5
2切断	20	7.3
3脳原性まひ	7	2.6
4疾病による機能障害	20	7.3
5その他	20	7.3
合計	273	100.0
欠損値	0	5

4) 障害受傷原因

表2 障害受傷原因	人数	割合(%)
有効		
1中途障害	238	88.8
2先天性障害	21	7.8
3不明	9	3.4
合計	268	100.0
欠損値	0	10

5) 障害を受傷してからの年数

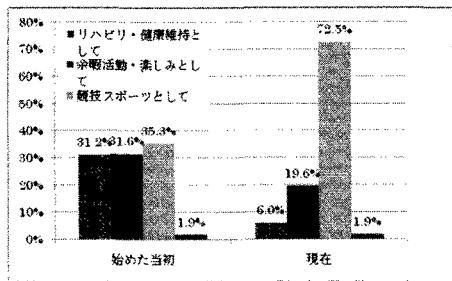
平均年数：17.3 年

標準偏差：11.716

6) チーム所在地

表3 チーム所在地	人数	割合(%)
有効		
1北海道・東北	55	20.0
2関東・甲信越	46	16.7
3東京	17	6.2
4東海・北陸	24	8.7
5近畿	23	8.3
6中国・四国	44	15.9
7九州	67	24.3
合計	276	100.0
欠損値	0	2

2. 車椅子バスケットボールの目的



3. 車椅子バスケットボールを実施することによる生活上の影響

表4 生活上の影響	人数	割合(%)
有効		
1友人が増えた	91	36.0
2体力がついた	39	15.4
3日常の行動範囲が広がった	51	20.2
4社会性が身についた	7	2.8
5ストレス解消・気分がすっきりする	22	8.7
6自分がついてスポーツ以外のことも積極的にやうやくになった	22	8.7
7生きているという実感をもてるようになった	7	2.8
8障害のない人と交流の機会が増えた	4	1.6
9その他	10	4.0
合計	253	100.0
欠損値	25	

4. 「障害」のとらえ方

表5 「障害」のとらえ方	人数	割合(%)
有効		
1自分のフレーを阻害(そがい)したり、制限するものである	16	6.5
2車椅子バスケットボールをする上での単なる持ち点である	47	19.0
3性格や人間性、考え方などと同じ自分の特徴の1つであり「個性」である	65	26.3
4いたしかたのないもの・受け入れるべきものとしてとらえている	54	21.9
5自分のプレースタイルを規定するものである	3	1.2
6車椅子バスケットボールに出会えたきっかけである	59	23.9
7その他	3	1.2
合計	247	100.0
欠損値	31	

5. 車椅子バスケットボール実施に伴う「障害」に対する意識変容

表6 車椅子バスケットボールを通じて障害を乗り越えられたと感じている

	人数	割合(%)
有効		
1非常にそう思う	47	18.1
2ややそう思う	93	35.9
3あまりそう思わない	92	35.5
4全くそう思わない	27	10.4
合計	259	100.0
欠損値	19	

表7 いろいろな障害をもつ人たちとの競い合いや、「持ち点制」によって、以前より障害を意識するようになった

	人数	割合(%)
有効		
1非常にそう思う	37	14.3
2ややそう思う	87	33.7
3あまりそう思わない	102	39.5
4全くそう思わない	32	12.4
合計	258	100.0
欠損値	20	

表8 熱心に練習に取り組めば取り組むほど、障害による自分の限界を感じるようになった

	人数	割合(%)
有効	1非常にそう思う	33 12.8
	2ややそう思う	71 27.5
	3あまりそう思わない	109 42.2
	4全くそう思わない	45 17.4
	合計	258 100.0
欠損値	0	20

表9 障害者としてではなく、自分は競技者であるという意識を持つようになった

	人数	割合(%)
有効	1非常にそう思う	75 29.4
	2ややそう思う	108 42.4
	3あまりそう思わない	60 23.5
	4全くそう思わない	12 4.7
	合計	255 100.0
欠損値	0	23

6. 「健常者」競技者との対戦およびプレーについて

表10 健常者選手とプレー、および対戦したことありますか

	人数	割合(%)
有効	1ない	247 96.9
	2いいえ	8 3.1
	合計	255 100.0
欠損値	0	23

表11 自分のチームに健常者選手が加入してほしいと思いますか

	人数	割合(%)
有効	1思う	147 58.6
	2どちらかと言えばそう思う	59 23.5
	3どちらかと言えばそう思わない	34 13.5
	4思わない	11 4.4
	合計	251 100.0
欠損値	0	27

表12 相手が持ち点のない「健常者」であるとことを不公平であると思う

	人数	割合(%)
有効	1非常にそう思う	22 8.5
	2ややそう思う	45 17.4
	3あまりそう思わない	103 39.8
	4全くそう思わない	89 34.4
	合計	259 100.0
欠損値	0	19

表13 「健常者」であることを意識せず、一人のチームメイト・対戦相手である

	人数	割合(%)
有効	1非常にそう思う	134 51.5
	2ややそう思う	97 37.3
	3あまりそう思わない	17 6.5
	4全くそう思わない	12 4.6
	合計	260 100.0
欠損値	0	18

表14 「健常者」の存在によって自分自身の障害を意識させられる

	人数	割合(%)
有効	1非常にそう思う	18 6.9
	2ややそう思う	78 29.9
	3あまりそう思わない	92 35.2
	4全くそう思わない	73 28.0
	合計	261 100.0
欠損値	0	17

表15 健常者には負けたくないと思う気持ちが強くなる

	人数	割合(%)
有効	1非常にそう思う	77 29.5
	2ややそう思う	85 32.6
	3あまりそう思わない	76 29.1
	4全くそう思わない	23 8.8
	合計	261 100.0
欠損値	0	17

IV 考察

1. 車椅子バスケットボール実施に伴う障害意識の変容
車椅子バスケットボールを始めた当初の目的については、「リハビリ・健康維持のため」31.2%、「余暇活動・楽しみとして」31.6%、「競技スポーツとして」35.3%となっている。当初から、競技スポーツとしてとらえていた人の割合が約35%いるものの、リハビリテーションや余暇活動としてとらえる人が多い点が指摘される。これは競技者の多くが中途障害者であり、病院やリハビリテーションセンターで車椅子バスケットボールに出会い、退院後も趣味として活動を継続していたものと考えられる。しかしながら現在の目的についてみると、72.5%の競技者が「競技スポーツとして」と回答している。この結果に加え「障害者としてではなく、自分は競技者であるという意識を持つようになった」という項目に約70%の競技者が「そう思う」と回答している。つまり「障害者」としての役割を期待された人々が車椅子バスケットボールと出会い、「競技者」としての役割を獲得し、「障害」が相対化された結果、自らを障害者として、というよりも競技者として認識するようになったものと推察することもできよう。

しかしながら、車椅子バスケットボールに取り組むことによって「障害者」意識が乗り越えられたのだろうか。この点に関して「車椅子バスケットボールを通じて障害を乗り越えられたと感じている」という項目について、「そう思う」と回答した者の割合が54%（「非常に」

18.1% + 「やや」 35.9%）に対して、「そう思わない」と回答した者の割合が 45.9%（「あまり」 35.5% + 「全く」 10.4%）となっており、必ずしも車椅子バスケットボールを行うことによって「障害者」意識の変容を引き起こすわけではないことに注意する必要がある。

2. 「障害/健常」意識の変容過程

「健常者」競技者との関係において 96.9%の競技者が「健常者」競技者とともにプレーしたことがあると回答していた。また「自分のチームに健常者選手が加入してほしいと思う」と回答した者の割合が 82.1%にのぼり、「『健常者』であることを意識せず、一人のチームメイト・対戦相手である」と回答している割合が 88.8%と大半を占めていた。これらの結果から大半の競技者が健常者との競技経験を有しており、健常者に対して、健常者としてというよりも一競技者として位置付けながら、健常者に加入してほしいという意識をもつ人が多い。

しかしながら、「『健常者』の存在によって自分自身の障害を意識させられる」という項目では 36.8%の競技者が「そう思う（「非常に」 6.9% + 「やや」 29.9%）」と回答している。これらの結果は、「健常者」と一緒にプレーしたい、「健常者」であることを意識しないと言ひながらも、時に「健常者」の存在によって自身の障害が意識化されるという葛藤を抱え込んでしまうということを示唆するものといえよう。

V 結果の要約と今後の課題

本研究では、車椅子バスケットボール競技者への調査を通じて、障害者スポーツ当事者のもつ「障害」「障害者」意識を明らかにし、「障害」をもつ競技者が「障害」のない競技者に対してどのような意識を抱いているのか、両者の関わりによる「障害/健常」意識の変容過程について検討を行った。

車椅子バスケットボールに参与することによって、競技者の多くが、「障害者」ではなく、「競技者」として自己をとらえるようになったと認識しており、スポーツ活動がアイデンティティ形成に大きな影響を与えていていることが示唆された。しかしながら、「車椅子バスケットボールを通じて『障害』を乗り越えられたか」という問い合わせに対しては、約半数の競技者が「そう思わない」と回答している。ここで重要な点は、スポーツさえすれば障

害が乗り越えられるかのような単純化された図式は、必ずしもあてはまらないという点である。また、この結果は、競技者個々人のアイデンティティは単一のものではなく、文脈に応じて多元的なアイデンティティが生成され、その中を生きているということを示唆するものともいえよう。障害者スポーツの場面において、スポーツ当事者のアイデンティティがどのように変容し、錯綜しているのかは今後の検討課題としている。

また、大多数の障害もつ競技者が「健常者」の参加について賛成をしており、ともにプレーする際には「『健常者』であることを意識しない」と回答している。しかしながら、その一方で「健常者」の存在によって自己の「障害」が意識化されるという傾向が看取され、障害をもつ競技者の葛藤の様相が明らかになった。今後、競技者の葛藤の生成過程および変容過程をより詳細に明らかにしていくために、「障害者」から見た「健常者」像だけでなく、「健常者」から見た「障害者」像についても調査を行い、両者を比較分析することで詳細に検討を行っていきたい。

「健常者」から「障害者」へのまなざし、「障害者」から「健常者」へのまなざし、この両者の接点を探ることで、障害者スポーツの可能性、障害の有無を超えたスポーツ参加の可能性が開かれていくのではないだろうか。

【参考文献】

- 阿部智恵子・樫田美雄・岡田光弘（2001）「資源としての障害パースペクティブの可能性—障害者スポーツ（水泳）選手へのインタビュー調査から」『年報筑波社会学』13, pp. 17-51.
- 奥田睦子（2003）「障害者スポーツ論の再検討」『金沢大学経済学部論集』24(1), pp. 329-345.
- 高橋豪仁（1999）「身体障害者スポーツに関する一考察—ソーシャル・ロール・パロリゼーションの視点から」『奈良教育大学紀要（人文・社会）』48(1), pp. 37~48.
- 星加良司（2002）「『障害』の意味付けと障害者のアイデンティティー：『障害』の否定・肯定をめぐって」『ソシオロゴス』26, pp. 105-120.

本研究発表は、「立教大学学術推進特別重点資金」の助成により行うものである。